

# いんげん 歳時記

## ◆発掘された江戸城石垣と

### 毛利家矢筈の刻印

平成十六年六月、千代田区霞が関の文部科学省構内で発見された江戸城外堀跡の見学会が開かれた。また平成十七年十月には千代田区歴史民俗資料館で特別展「江戸城の堀と石垣」―発掘された江戸城―が開催されている。

その中に佐伯藩が負担した石垣部分も含まれており、毛利家矢筈の刻印が数多く発見された。これらの情報を東京在住の知人から得た若宮区宮本孝義氏が、佐伯史談会へと資料を提供下さった。

「江戸城の堀と石垣」によると、近年発掘調査された外堀は寛永十三年



江戸城外堀跡・石垣見学会

(二六三〇)に築かれた外堀普請で、三代將軍徳川家光の命によって一〇〇を超える大名家を動員した天下普請だったという。

佐伯藩は三代毛利市三郎高直が、普請組頭・岡山藩池田光政の助役大名として関わり、分担した石垣二カ所が発掘されている。



文部科学省構内遺跡

その一つは江戸城東側外堀(丸の内一丁目遺跡)で六間一尺七分(12.2m)を分担、もう一つが江戸城南側虎ノ門付近(文部科学省構内遺跡)である。

「石垣の符号」について、築石の刻印は全てに刻まれているわけではなく担当大名の差もあり、佐伯藩毛利家の丁場部分ではほとんどの築石に刻印され、

この大名は刻印を積極的に用いる傾向がある、としている。

また「刻印のモチーフ」について、様々あるが佐伯藩のように毛利家紋「矢筈」に由来するもの、同じ佐伯藩が担当した二方所では異なった刻印が用いられている。と分析されている。



毛利家丁場部分

◆資料提供者

宮本孝義氏のことば

前略、史談会の活動に敬意を表します。社会は先人の文明文化に学ぶ新しい温故知新を求める時代となっております。特に『大都市は人が創るが田舎はつくれない』の価値が高くなりつつあるとき、今日の地域おこしに取り組んでいける若者を啓蒙、後世への伝承を担当してもらうため役立つものならと資料を届けます。

なお協力してくれる合谷氏は佐伯東小学校の同級で、ふるさとに関心の高い人物です。

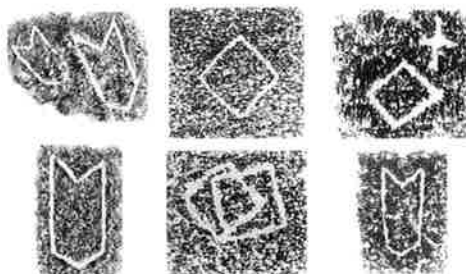
会の益々のご発展を祈念します。

(※佐伯藩と云わず毛利藩と誤っているのは要注意)

宮本



毛利家と戸川家の丁場境

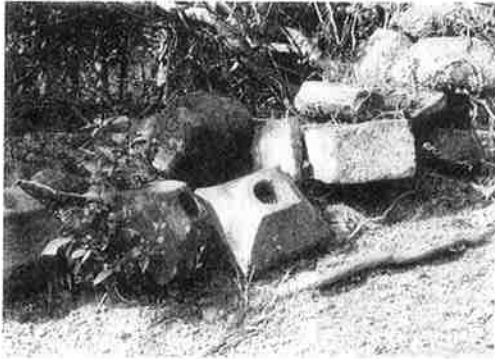


佐伯毛利家丁場の築石刻印

(左：文部科学省構内遺跡・右：丸の内一丁目遺跡)

◆「蒲江町史」と宝光庵

この度、新佐伯市合併を前に編纂されていた新「蒲江町史」が発刊された。昭和五十二年に発刊された旧「蒲江町史」は故羽柴弘先生の労作だったが、新史資料等によって再編され、第三編「蒲江町五〇年の歩み」に多くの紙面が割かれている。



宝光庵五輪塔群の現状

第五編「文化財」に宝光庵（河内）

の五輪塔群の解説があり、整然と並んだ室町期の石塔群の写真が掲載されていた。前号に三重町宝光寺を紹介したが、あるいは北浦に近い蒲江の可能性を考え、会員川野晃斉君と訪れた。『寺社記』には東光寺末「地藏庵」とあり、近年新築された真新しい御堂にも地藏菩薩が安置されている。

江戸以前には有力な一族の菩提寺が在ったものと思われるが、肝心の五輪塔群は既に形を失って境内脇の藪の中に放置されていた。宝光庵の由来を秘めた貴重な文化財を御堂の傍らに再整備して欲しいものである。

◆船頭町の山車「狸々」について

会員汐月三代吉さんが小冊子「船頭町の山車はなぜしようじょうなの？」を手作りして知人などに頒布した。

船頭町の山車はなぜしようじょう



五所社神幸祭のお供につく船頭町の山車には赤毛長髪の奇妙な人形が三体飾られている。これは能や謡曲で知られた「狸々」という妖精の姿で、親孝行な酒売りに汲んでも尽きない酒壺を与えたという中国の故事による。狸々は「富と幸せを運んでくる福の神」として社殿建築や縁起物のモチーフによく使われている。

五所社の神幸祭・船頭町消防百年史・船頭町の成り立ち等、歴史的背景と「狸々」の由来を編集している。

◆日本に誇れる佐伯文庫と四教堂

八代藩主毛利高標は寛政の三大学者大名の一人、藩校「四教堂」を城内に開設し、八万巻の蔵書を集めて三の丸に「佐伯文庫」を創設した。中でも漢籍（中国の書物）の質量は日本一と評されている。

四月、市民グループ四教堂塾は三の



佐伯市長と佐伯文庫跡の石碑

丸公園に「佐伯文庫跡」の石碑を設置

した。昨年も大手前の利用されていない掲示板を借りて「藩校四教堂跡」の表示板としたが、今回は藩校四教堂の教授、松下筑陰・明石秋室・中島子玉・高妻芳洲各先生の墓や、御典医今泉元甫の墓に手作りの標柱を立て、元甫堂屋敷跡の案内板も設置した。

佐伯の教学発祥の地は現在文教地区となっているが、未だ歴史資料館も無く、佐伯の藩政資料や佐伯文庫の公開もおぼつかない。先学の足跡を顕彰して誇りある佐伯人の育成に役立てたいものである。

◆来訪者

●矢野龍溪の生誕地を訪ねて名古屋の大学生金綱俊伸君がやって来た。話を聞いてみると、矢野龍溪のことは我々よりも博学で「経国美談」の初版本な

ども収集しているとのこと。

残念ながら佐伯には矢野龍溪の生誕地を示す標柱しか見せられるものがない。三の丸にある龍溪の碑に刻まれた漢詩について原本は何処にあるのかと質問され、うっかり市指定有形文化財であることを認識しておらず、後でお知らせします…とは、おそまつ。

萬里之洋 千仞之岳

天地秀靈 其俗淳厚

壬子初春 龍溪

(佐伯市教育委員会管理)

●福岡県新宮町の「歴史と自然保護の会」所属の山本郁子夫妻がふらりと「魚のおいしい城下町」をイメージしてやって来た。「しまった、何にもない町だった」と失望していたが、文化会館の館長が親切に対応して養賢寺墓所まで案内してくれたので「ホッ」としたという。

特に期待した収穫はなかったようだが、筑前立花城の立花道雪の話しで盛り上がり「ぜひ来てください、立花城や伊呂姫の菩提を祀る清水家を案内します」と、上岡十三重塔を見学して津久見の大友宗麟の墓へ向かった。



◆頼三陽と桜間青崖

故会員染矢勘蔵さん宅に頼山陽の書幅と桜間青崖の画幅が所蔵されている。奥さんの話によると、一つは戦時中わが家に疎開していた人が謝礼に置



頼山陽の書幅

いて帰ったもの、一つは勘蔵さんが囲碁仲間から譲り受け、旧藩士が借金のカタに置いていったものだという。

頼山陽は有名な江戸時代の儒学者・詩人で名を襲、字は子成、号は山陽外史あるいは三十六峰外史という。三十九歳のとき日田咸宜園に広瀬淡窓を訪れ「私は西遊して山水に耶馬溪を人材に中島子玉を得た」と子玉を讃えた人物である。

桜間青崖の画幅



桜間青崖は江戸本田侯の絵師。佐伯

藩士山崎文内の師で佐伯に滞留したことがあり、山崎文内の弟久保田南屋も江戸に出て青崖に学んだ。